

県総合教育センター特別支援教育部

本講演会のメインテーマは、「一人一人が輝く共生社会の形成に向けて」である。障害の有無に関わらず、誰もがその能力を発揮し、共生社会の一員として共に認め合い、支え合い、誇りをもって生きられる社会の在り方について広く考えていきたい。

千葉教育 令和6年度 萩 29

企画展「赤松宗旦と『利根川図志』」 9月28日（土）～11月24日（日）

県立関宿城博物館

『利根川図志』は、江戸時代末の安政期に下総国布川村（現茨城県利根町）在住の開業医、赤松宗旦によって刊行された。利根川という河川に関わる自然・地理・歴史・伝承などについて、過去の文献と現地の見聞に基づき、挿絵付きでまとめられており、地誌として、紀行文として、また百科事典として、当時を知るうえで大変貴重な資料である。

今回の企画展では、作者・赤松宗旦の生い立ちや、宗旦が執筆を思いついた刊行に至るまでの経緯と、『利根川図志』そのものに記された内容を紹介する。



『利根川図志』に描かれた関宿付近の利根川

1 赤松宗旦について

赤松宗旦は、利根川沿いの下総国布川村に生まれ、千住宿（現東京都足立区・荒川区の一部）に移った後、父親が亡くなったため母親の実家である下総の吉高村（現印西市）に身を寄せた。医者であった父の跡を継ぎ、宗旦も医師を志し開業する。その後、再び布川に戻り、医業の傍ら『利根川図志』の執筆を行うに至った宗旦の生立ちを紹介する。

2 『利根川図志』の出版と販売

江戸時代後半、利根川流域は舟運で栄え、

河岸問屋や廻船問屋などが財を成していた。地域の経済力は多くの文化人を引き寄せ、利根川周辺の豊かな文化へとつながる。宗旦が生まれた布川村も河岸として大変栄えた地域で、多くの文化人が交流していた。

また、治安が安定した時代が続いたことにより、庶民も旅行ができるようになり、各地の様子を紹介した紀行文などが多く出版されるようになった。

こうした当時の社会的背景や、宗旦と交流のあった文化人などを紹介し、『利根川図志』の執筆に至った経緯と、出版までの過程や販売について紹介する。

3 『利根川図志』を読む

『利根川図志』には、流域各地の旧跡にまつわる歴史や伝説、物産、植物や魚や虫、岩石など実に様々な記述がある。当館が所在する関宿についても城の歴史を詳しく紹介しているほか、絵を好む眼科医も登場し興味深い。また、宗旦の出身地である布川については、歴史や寺社、祭礼などについて挿絵付きで解説されている。展示では、これらの内容について詳しく紹介する。



銚子の海亀島と海亀の挿絵

「地中からのメッセージ～旧石器・縄文・弥生～」 公益財団法人千葉県教育振興財団 設立50周年記念展 part 1 9月21日（土）～11月17日（日）

県立房総のむら 風土記の丘資料館

9月21日から、房総のむら風土記の丘資料館（栄町）では、公益財団法人千葉県教育振興財団の設立50周年を記念する特別展示を開催する。

1 千葉県教育振興財団と房総のむら

千葉県教育振興財団は、昭和49年（1974年）11月1日に財団法人千葉県文化財センターとして発足し、令和6年11月に設立50周年を迎える。

設立以来、県内の埋蔵文化財の発掘調査を数多く行い、文化財保護思想の普及を推進し、県民の生活向上と地域文化の進展に努めてきた。

平成18年からは房総のむらの指定管理者となり、それまで培ってきた独自の知識・技能や育成された人材等の経営資源を活用し、房総のむらの発展やサービス向上にも寄与している。



文化財センター（四街道市）



房総のむら 風土記の丘資料館（栄町）

2 設立50周年記念展の概要

千葉県教育振興財団文化財センターが50年にわたり行ってきた埋蔵文化財調査で出土した選りすぐりの資料を、房総のむら風土記の丘資料館で展示公開する。市原市草刈遺跡出土の腰飾は、縄文時代の装身具としてその意匠が大変興味深いものとなっている。また同じく市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、千葉県と東海地方との関係を示す貴重な資料だ。千葉市六通神社南遺跡出土の槍先形尖頭器も、その石材を調べると千葉県で産出されたものではなく、他地域との交流を予感させるものであり、必見である。

期間中には展示解説会や考古学講座、貝輪作りなどのワークショップも行い、千葉県の歴史をより深く知っていただける内容となっている。

50周年記念展は2か年を予定しており、今年度はpart 1として、旧石器・縄文・弥生時代を、来年度はpart 2として古墳時代以降について取り上げる予定である。ぜひ、この機会に千葉県の豊かな歴史の一端を覗いてみてはいかがだろうか。



腰飾
（市原市：草刈貝塚）



小型銅鐸
（市原市：川焼台遺跡）